令和五年《列島春秋》

一月　わかさぎ釣り三世氷上の初笑い　那珂剣坊子

二月　凍裂や樹幹のバチーンという悲鳴　村　牛歩

三月　白鳥帰る炎の村をまならに　粥川　青猿

四月　長老の密談めくや谷地坊主　小飼　紫香

五月　全校に桜蘂ふる北領土　江波戸　明

六月　対岸の沸騰やまず海霧の昼　鮒橋　郁香

七月　縦縞の景続く村昆布干され　吉野喜代子

八月　十勝野やカフェ・ラテとなる夏の暮　金野　克典

九月　秋刀魚船浮かして消して移流霧　中尾　克彦

十月　国後（くなしり）島の稜線しかと厚岸草　横地　妙子

十一月　鮭颪鉄路の跡や吾が根っこ　飯沼　風華

十二月　少女等の喝采である霜の花　石川　青狼

◎会員動向

入会　伊藤　やすさん（大樹町）

退会　榊田　澄子さん（釧路市）

現在会員数　三十四名

◇編集後記◇

令和六年も明けたばかりのような記憶のままに、現実は早七月となってしまいました。会報十八号をお届けすることができて安堵しています。お読みいただいての感想など頂戴できましたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（斉藤）

～令和6年度上半期　わたしの一句～

皆様の思い出の一句をお楽しみください。

並びぬて武器にはならず軒氷柱　荒川　美恵
ごくんと一杯蛇口より年明く　飯沼　風華
わだかまり解けて安堵の冷し酒　伊藤　やす
十二月八日包んだオブラート　江波戸　明
幾寅はおぼろの夜へキハ４０　粥川　青猿
逆風をえらび真顔の冬鷗　小飼　紫香
嘲笑も罵倒も散らす春颯　金野　克典
盛装の母は農婦や花まつり　斉藤　郁子
父さんは名カメラマン花筏　佐藤かよ子
満月のとなりの席があいている　清水　健志
略地図のなにもないところは蒲公英　菅原　釈子
冬木立染めて没日の一筆箋　寺田　保子
窓開けて先ず深呼吸事始め　那珂剣坊子
歯の抜けた二人の孫の福はうち　中尾　克彦
崩れたる瓦山茶花より低く　中島　加奈
あずまやに子ども七人鳳仙花　中村きみどり
頭の中は文字の踊り場良寛忌　中島　土方
電信柱のやきもち木の根明く　西村　奈津
幾人の好き人渚へ不知火忌　芳賀　知子
餅焼いて母との思ひ裏返す　早川千鶴子
そこそこの春愁を漕ぐだまし舟　鮒橋　郁香
雪解川私の顔が流れゆく　松原　静子

虎が雨手紙がほしい夜の在りぬ　村川三津子
雪を掻くたかが身の幅活きる幅　山田美智子
一番星汝の指より固きワラビ　山本　勲
おぼろ夜の片隅におく旅かばん　横地　妙子
啄木忌釧路は砂も湿っぽい　よしざね弓
草の餅賞味期限を認めあふ　吉田　洋子
心ポンプの出口ぱおぱお春立ちぬ　吉野喜代子
棒に振るチャンスからりとかざぐるま　脇本　文子
現実は何でもなくて雪解風　脇本　千尋
雪暗れの湿原列車から汽笛　石川　青狼

◎　今後の行事予定　◎

・墨書展　10月17日より1ヵ月間
　　プラザさいわい
・月例句会　毎月第3木曜日
・初心者俳句教室（詳細は未定）
・文学団体色紙展
　　10月14日～20日迄
　　市立図書館

第三十三回 北海道大会会員作品抄

微なる反骨とりあえずマフラー巻く　飯沼　風華
昭和平成まるごと生きて寒の紅　早川千鶴子
かげろうに巻き尺の鬱解き放す　中島　土方
平べったいスイッチばかり目借時　菅原　釈子
沸点を超え向日葵の瞠目　清水　健志
風の私語許さぬ母郷の樹氷林　松原　静子
愛いろの酸素ほしがる鯉幟　鮒橋　郁香
シマエナガの脚をくするぐえくぼ花　中村きみどり
はだら雪欠片だらけのドロップ缶　西村　奈津
つくり話かもしれず蜃気楼　横地　妙子
鬼灯の個個へ夕日のおよびけり　吉田　洋子
死者生者アルバムの中も吹雪　粥川　青猿
たんぽぽの綿毛地下鉄ホーム過ぐ　中島　加奈
戦争なんだ風花の美しい間合いに　山本　勲
草氷柱つい深入りの氏素性　吉野喜代子
駆け落ちは網走と決め珊瑚草　よしざね弓
半導体とふ言葉社会に吾に古茶　寺田　保子
梅古木塀に凭れて咲く縁　石川　青狼

第三十四回北北海道大会会員作品抄

鍵盤の奈落に眠る月光　清水　健志
枇杷は黄に次男の音沙汰はさざなみ　山本　勲
春の闇骨壺同士共鳴す　石川　青狼

第三十回 東北海道大会会員作品抄

人生の巻尺走る昭和の日　中島　土方
傲慢な十七文字や細雪　金野　克典
ゆたんぽの余熱の中に忘れもの　江波戸　明
転生の母を捜しに行く春野　鮒橋　郁香
晩学の赤えんぴつに伸ぶ日脚　山田美智子
狐火の指を鳴らせば消えてをり　横地　妙子
相槌をうつ牛もいて夏の果て　佐藤かよ子
国境の闇に横たふ寒北斗　寺田　保子
たっぷりのひかり呑み込む雪解川　小飼　紫香
春眠はデンタル椅子の座面から　吉野喜代子
流氷や盤上の丸腰の王　清水　健志
逃水や少し静かにしてください　村川三津子
職退いて鯨を釣りに行ったきり　伊藤　やす
信号機から落ちる粉雪の音　中村きみどり
初湯して父の足裏のいとけなし　斉藤　郁子
少女らにもっとも遠き白日傘　中島　加奈
雨にぬれ雨音に立つ木の芽かな　吉田　洋子
スイートピーおっとあふれて片想い　脇本　文子
春眠や微かに揺れるブラインド　脇本　千尋

第三十三回中北海道大会作品抄

極月の気の沈みゆく塩加減　江波戸　明
着ぶくれて段差たしかむ杖の先　早川千鶴子
廃駅に足跡ひとつ細雪　金野　克典
鳩時計冬が本気で動く音　松原　静子
じゃが芋の芽が出て夢に追いついて中村きみどり
薄氷の泥んことなる途中　鮒橋　郁香
元旦や女子アナ叫ぶ「すぐ逃げて」斉藤　郁子
同郷なり同時代なり丹頂　清水　健志

令和六年釧路俳句連盟新春句会　一月六日

落款を押して淑気の起ちのぼる　吉野喜代子
読初は戦禍の匂い兜太の句　村川三津子
人日の生命線を日にかざす　横地　妙子
この星の未来あやぶむ大旦　早川千鶴子
本心はハッピーですかニューイヤー石川　青狼

令和六年度釧路俳句連盟総会俳句大会

五月二十四日

桜予報不穏な平和ひきずりて　早川千鶴子

春風のリズムに合わす歩幅かな　小飼　紫香
鳥帰る海に尽きたる滑走路　横地　妙子
君ゆきて猶予何年飛花落花　石川　青狼

釧路現代俳句会作品抄

一月例会

持ち歩く大根一本お買初　荒川　美恵
ごくんと一杯蛇口より年明く　飯沼　風華
病癒え餅ふたつ食ふ年新た　北原　白道
被災地にせめて熱々大福茶　小飼　紫香
初日の出邪教徒いっぱい夢いっぱい金野　克典
モニターの戻るは易し去年今年　斉藤　郁子
しりとりをしながら帰る雪催　佐藤かよ子
隠伏の龍は放たれ飛雪　清水　健志
ロータリー抜けて冬日の裏返る　菅原　釈子
激震報雑煮盛らるる輪島塗　寺田　保子
ミャンマーの人に夜具持たす年の暮　那珂剣坊子
繭玉の上に陽をさす日の出かな　中尾　克彦
羽子板の大谷翔平らしき人　中島　加奈
溜息を出して初空吸い尽くし　中村きみどり
年逝くや飢餓の世界の大きな瞳　西村　奈津
年末の「ショーシャンクの空に」仄灯し　芳賀　知子
極月や文字の細かき取説よ　早川千鶴子
空青し雪だるまには耳が無く　鮒橋　郁香
真青なるセーターの色初句会　村川三津子
なみなみと年酒注がるる卒寿かな　横地　妙子
初手水清めの科学的根拠　よしざね弓
この地球に衣食足り住み節料理　吉野喜代子
未来はもう過去の顔して冬銀河　脇本　文子
核心を突けずへにゃへにゃ鍋うどん　脇本　千尋
激震に押し潰されしこの元旦　石川　青狼

二月例会

咳三つ使はぬ筋を鍛へをり　荒川　美恵
食うことに費やす時間寒卵　飯沼　風華
被災地へ向けて恵方を丸かじり　北原　白道
逆風を選び真顔の冬鷗　小飼　紫香
贖罪を受け入れ賜え枯木星　金野　克典
「ともぐい」の読了の果て流氷来　斉藤　郁子
雪かきの後のごはんと寒卵　佐藤かよ子
日本海冬が膝から崩れ落つ　清水　健志
春光の真中へプラスドライバー　菅原　釈子
ふと口にロシア民謡寒夕焼　寺田　保子
窓開けて先ず深呼吸事始め　那珂剣坊子
歯の抜けた二人の孫の福はうち　中尾　克彦
携帯を持たず冬鴎でいる一日　中島　加奈
地吹雪はおんなの美容液なのよ　中村きみどり
凍てる夜の体内(うち)に流れる不凍液　西村　奈津
幾人の好き人渚へ不知火忌　芳賀　知子
打たれゆく数多の恋や歌留多会　早川千鶴子
四肢伸ばし不眠を遊ぶ寒の明け　鮒橋　郁香
どこに飛んでも話つつ抜け鬼の豆　村川三津子
あたたかや卒寿の眉を描き足して　横地　妙子
蒸し牡蠣の浴びるほど酒香らせて　よしざね弓
愛用の杖こつこつと日脚伸ぶ　吉田　洋子
心ポンプの出口ぱおぱお春立ちぬ　吉野喜代子
流氷や身重の日々のとほきこと　脇本　文子
中継の向こうで梅が咲いている　石川　青狼
雪暗れの湿原列車から汽笛

三月例会

めぐり合ふ子持ち鰊のしたたりぬ　荒川　美恵
おやっ風花門出の華ですね　飯沼　風華
春霞出るも去るも然り気なく　北原　白道
ピロシキの具にルールなどなく余寒　小飼　紫香
各々の幻想重ね細雪　金野　克典
白米に梅一粒を沈めたり　斉藤　郁子
MRI春を探して音の森　佐藤かよ子
鶴ひらり劇場となる雪原　清水　健志

フォークの背にのせたるライス山笑う　菅原　釈子
冬木立染めて没日の一筆箋　寺田　保子
ブギウギや北の大地も春催　那珂剣坊子
春風や子猫と会える散歩道　中尾　克彦
スィートピー斜向かいからの正論　中島　加奈
雪女郎推し活わりと熱い方　中村きみどり
電信柱のやきもち木の根明く　西村　奈津
若き等とロマンの成就ミモザの日　芳賀　知子
はらからの円居のごとく木の根あく　早川千鶴子
年度末子だくさんの谷地坊主　鮒橋　郁香
読み返す幸せメール春の雲　村川三津子
おぼろ夜の片隅におく旅かばん　横地　妙子
百歳の肌には若き雛かな　よしざね弓
草の餅賞味期限を認めあふ　吉田　洋子
文旦剥く厚さ図抜けし母性かな　吉野喜代子
子猫と手合わせほのほの見る未来　脇本　文子
アクリル板ぱきぱき割って春の海　脇本　千尋
空耳と少し浮遊の春の闇　石川　青狼

五月例会

待つという刻をゆたかに種を蒔く　飯沼　風華
桜前線最終走者釧路八重　北原　白道
花冷えや誰かにあげる木曜日　小飼　紫香
身の程を知らぬ獣や桜散る　今野　克典
残花かないくさ上手のGoogleマップ　斉藤　郁子
父さんは名カメラマン花筏　佐藤かよ子
道問えば花は雨滴を差し出しぬ　清水　健志
片翼をひらくタクシー夏近し　菅原　釈子
咲き初める紫躑躅母の忌来　寺田　保子
現世に一瞬息む春の風　那珂剣坊子
喧嘩売る紋白蝶に猫キレる　中尾　克彦
桜さくらサクラしつこくてごめん　中島　加奈
蜆汁世界経済の行き先　中村きみどり
空気圧いささか足りぬ昭和の日　西村　奈津
寄辺無き胸処に落ちるカーネーション　芳賀　知子
湖の鼓動と対峙蕗のたう　早川千鶴子
ざわざわと一周忌なり初桜　鮒橋　郁香
薪を足す彼の指さき紅薔薇　村川三津子
棲み古りし街新緑のひぶな坂　横地　妙子
コロニーに小人星人野地坊主　よしざね弓
タイヤ替え陽炎越えて行く途中　吉野喜代子
棒に振るチャンスからりとかざぐるま　脇本　文子
スクリーンショットの端に青葉風　脇本　千尋
父の忌の辛夷あなたの強い筆圧　石川　青狼

六月吟行句会

温根内ビジターセンター　参加十一名

吟行日和のこの日、ヒメカイウやサギスゲがちらほらとみえる木道を散策して名句をひねりました。レクチャールームで昼食後の句会は、笑い声が満ちて和やかに終始しました。

木道に結界ありて老鶯　小飼　紫香
カッコーカッコウ君の聲だけ忘れない　斉藤　郁子
鷺菅や水平線を見たような　清水　健志
男らの快活が好し燕子花　菅原　釈子
青水無月のど真ん中なる一人かな　寺田　保子
タクト振る北斗展望台春の雲　中尾　克彦
夏手套巡礼のごと湿原へ　西村　奈津
泥炭地は終の住処かヨシ直立　鮒橋　郁香
木道は「そだねー」「そうね」夏の雲　村川三津子
初夏湿原万の葉先の瑞々し　吉野喜代子
鷺菅の花穂の一途のこの連帯　石川　青狼

「追悼」山陰　進ー俳句にかけた人生「案愚工房」を観る

江波戸　明（上士幌町）

私と山陰先生との出会いは俳誌「樺の芽」から始まり、東北海道現代俳句協会交流帯広句会です。山陰先生は若くして俳句の世界に入り、独特の俳句感を発揮し多くの作品を残しています。私は「山陰進第一句集「一季集冬」に残された俳句に、山陰進の原点とその影を感じます。句会での選評では鋭い話しぶりで提出された俳句を語ってくれますが、それは常に人生の中で学んで生きてきた姿、更に生きていくべき姿を追いつつ、深い含蓄を持って解説していました。さて、山陰進俳句集「案愚工房」を読んでまず安心したのは、冬を原点として、人の生き様の厳しさをしっかり残してきてくれた句集であることです。当然、俳句は四季折々の季語があり、自然界や動物などの営みは激しく変化します。その中で人はどのように自然界に接しながら、喜怒哀楽の変化の中で生き抜くか、この心髄を表現することも俳句文学の役割であり、山陰俳句の求める姿であると感じています。その経過を踏まえ、この俳句集から充分俳句が人々の心の動きを捉え、表現する力を持つという役割を感じ取れました。「**吹雪く街の一滴の血となりて棲む**」は自分の生き様と覚悟を一滴の血とした発見、「**草餅や母の指先溶けている**」は母の気持ちと感謝の表現、「**八月を刻んだ本が少しある**」戦争に対する平和を追求した目線、最後に収めた俳句「**灯りを消すぐんぐんと氷点下**」は、山陰先生の俳句にかけた人生の全うを自ら納得し、家族や句友などに感謝している空気感が見えました。

第三十三回北海道現代俳句大会に参加して

鮒橋　郁香

今年の最大イベントである北海道現代俳句大会が六月九日（日）、ホテルリソル函館を会場に開催された。出席三八名、投句数五〇六句。講師に現代俳句協会副会長、「麦」会長の対馬康子氏をお迎えし、演題を「斌雄・青邨・朗人―こころの高まり」として、一時間ほど対馬氏の師である中島斌雄、有馬朗人と山口青邨について例句を出しながら解説をされた。実景を通し、見えないものの向こう側を描いて心を語る。自分との対峙。それが俳句的に生きるということで俳句活動は喜びである、と語られた。

引き続き行われた表彰式では対馬康子氏、石川青狼、五十嵐秀彦、橋本喜夫、都賀由美子各地区会長の順でそれぞれの特選句を中心に講評が行われ、会場が賑わった。その後、会場を十階レストランに移して懇親会。お開きの声がかかった頃、飛行機の天候トラブルで遅れていた清水健志氏がようやく到着！　函館に移転していた中島加奈さんとも対面でき、心配していた雨に濡れることもなく、無事に全日程を終了することができた。

また全体的に会員数減少に悩むなかで、特に今回主管の南北海道地区はその傾向が強いのだが、今大会の受付をしてくれたのが数名の高校生俳人である。一生懸命に案内や資料配付をしてくれたり、また講演のあと対馬康子氏に質問に来るなどの初々しい姿がとても印象的であった。

◇大会入賞作品◇

第三十三回　中北海道現代俳句大会（4月7日　札幌）

雪つぶて背中がうれしそうだから　石川　青狼

頭の中は文字の遊び場良寛忌　中島　土方

第三十四回　北北海道現代俳句大会（4月14日　旭川）

時に死はふんわりと来る波の花　斉藤　郁子

第三十回　東北海道現代俳句大会（4月21日　釧路）

退屈な電話ボックス日脚伸ぶ　小宮　富子

お降りや母いなくても母の家　岡本　順子

はらわたへごつんごつんと寒の水　粥川　青猿

略地図のなにもないところは蒲公英　菅原　釈子

並びゐて武器にはならず軒氷柱　荒川　美恵

餅焼いて母との思ひ裏返す　早川千鶴子

青き踏む頑張らなくていい余生　飯沼　風華

風船よ逃げなさい血の渇くまで　西村　奈津

孤独死を告げる首振り扇風機　よしざね弓

難民のようにああああと寒鴉　松原　静子

第三十三回　北海道現代俳句大会（4月9日　函館）

煮凝りに深海の闇滲みだせり　江波戸　明

鹿児島県出水市・釧路市交流句会

鹿児島県出水市と釧路市とは鶴が取り持つ縁で平成元年から友好都市となり、平成三年から二年に一度行き来し文化交流を続けている。今回は一月二十八日（日）釧路市生涯学習センターに於いて能や日本舞踊、民謡が披露され、また一階ホールでは絵画、陶芸、華道と短歌・俳句の色紙展も行われた。今年は出水市から俳人四名が来られたこともあり、四階和室にて釧路の十一名と共に句会を行った。

「思ったよりも暖かいですね」「昨日はかじか汁を食べました」などの話が行き交うなか、石川会長の進行で句会は和やかに二時間で終了、記念撮影をして散会した。

句会参加・石川青狼、吉野喜代子、小飼紫香、清水健志、西村奈津、村川三津子、山田美智子、鮒橋郁香

一位　幣舞の夕日乗っける蓮氷　石川青狼

色紙展参加・石川青狼、寺田保子、斉藤郁子、清水健志山田美智子、村川三津子、鮒橋郁香

交流句会

色紙展

ご協力
ありがとうございました

20日
東北海道現代俳句協会会報
第18号
令和6年7月

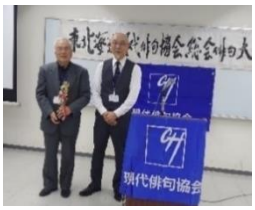
東北海道現代俳句協会
発行人　石川　青狼
編集人　斉藤　郁子

第三十四回　東北海道現代俳句協会総会

令和六年度の定期総会は、四月二十一日（日）釧路市生涯学習センターにて、会員数三十四名中出席十六名、委任状十四名で会員三十四名の過半数をもって総会は成立いたしました。

事前に合同役員会を開き、議事進行等の確認をした後、十三時より総会。議長に江波戸明氏を選任、昨年度の事業・会計決算報告と令和六年度事業計画・会計予算案が共にすべて承認されました。議事終了後、功労者表彰があり、東北海道現代俳句協会大賞を粥川青猿様に、協会功労賞を吉田洋子様、松原静子様（欠席）に、記念トロフィーが贈呈されました。

規約改正について・・東北海道独自の「地区会員」制度を設けるにあたって呼称　年会費等についての規約改正。慶弔規定も実情に合わないので一部文言削除



吉田洋子さん、粥川青猿さん
おめでとうございます

議長の江波戸さん

第三十回　東北海道現代俳句大会

四月二十一日の総会終了後、第三十回東北海道現代俳句大会が開催されました。のべ百一名から二百八十八句の投句があり、出席は二十九名でした。

講師　石川　青狼会長
演題　碧梧桐と幣舞会（へいぶかい）
俳句大会　選評と表彰
懇親会　生涯学習センターまいづる
（二十三名参加）

「出会いに感謝」

粥川 青猿

この度は思いがけず身に余る賞を頂き驚いております。本協会が設立されて三十四年、当時活躍された先輩の殆んどが今や黄泉の彼方です。数々の思い出が脳裏に浮かびますが、その掛け替えのない出会いに感謝し、先人の思いを忘れず、さらに精進して参りたいと存じます。まことにありがとうございました。